

近世壽跡考

二

106
1

15
106
1



山東蕭主人德華

近世奇考

東都書房 青山堂梓

言の跡考序
搬演傳言の之書。爽々朗々。天
説人之話。活言可以導導愚心。致之疑。
言の情。可表一の懼之事。皆可
以洞心豁胃。其戲譎快通。可
以資彼。相可。以祛長死之惡魔。
活子秋之熱血矣。其解人之
功。亦為不少矣。然傳言のこ

門 會 田 1 5
號 106
卷 1

近世奇考 卷之二

體以下。遵之于原。不据其心。如
影。撰百般。呈佛。溷真。為迷
作之巧。故現造化。未生之人。於
三子界裏。裹抽。一旦。古來。古之事
於億萬劫。聞之。聞創見。巧
肆詭詞。以美。青。白。日。之。世
界。之。活。活。沒。清。委。巷。狗。女
之。月。月。論。俠。士。君。子。之。骨。髓。
之。及。使。古。人。偉。事。之。矣。談。湮。沒
不傳。埋。寃。亮。失。信。正。其。誣。世。之。害
不。為。不。可。笑。醒。之。先。人。長。於。戲
文。恒。作。謬。收。心。無。就。考。之。詞。寫。各
無。息。息。之。情。以。之。單。辭。使。讀
者。解。頤。而。不。止。既。以。其。伎。在。右
於。世。須。執。人。就。其。無。根。傳。高
而。亦。其。有。據。之。事。始。遂。搜

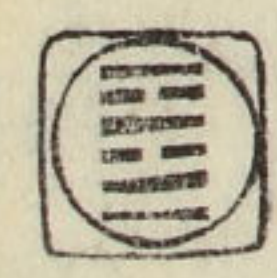
生時之安。近辨俗說之妄。迺
裒錄為五卷。名曰古今奇記。
考云。一日携酒訪余村居。余
時會客行酒。老人不辭飲。在
席末。探懷出一小冊子。謂余
曰。願使先生一言以增價焉。余
已沾醉。乃笑而領之。其夜客
已散。將就眠。月尚射窗。窓

杜鵑頻傳響。因挑燈側枕。
繡堦人書。仙卧隨覽之初。翻三四
葉。順流讀過。則披言。路。路
幽。蹤。而漸至佳境。若如武陵。桃
源。步。着。着。勝地矣。讀至其半。
別行。字。裏。破。支。敵。傳。會。之
浮。說。者。如。入。洞。出。洞。而。遊。於。別
世界矣。讀至可。末。別。圖。所。末。字。

近世奇林考 卷之二 〇三

見所未見者如耆先相會說
魏晉以上之事矣其博稽細
搜使二百年間偉事美德之
湮沒埋寃者洗雪扶擿發
於再表白於今日正焉又其仿拾
古人之遺逸函考往昔之風俗
時變而證之其言恠爽朗醒
士君子之眼者非前日戲文措
仍

取媚之類也其決然解誣之功
亦不為不白足不虞又全篇讀
畢而掩卷則村鐘報曙遠
興掃閒窓子自酌卯酒二
杯攬華而書之
曆紀文化元年甲子五月龍生月
閩東醉翁 鵬亦撰



近世奇亦考 卷之二 五

二百年來都會
地太平時常喜
生生樂事不盡
江東俗又是人間
燕樂城一杖



凡例

○古を好む人その代を考てあることとやあることあり千歳
の物を多し時ありて今あるものもあれど近き世の考はよりて
疎にして實を失ふるものありて偶口碑の傳ふるも虚
妄のこぞおわゆる後の世は又今をいひてあつてあつて人
もあるべきものをとておもしよりしより物を秘蔵しお索
事を珍書お探舊蹟おしり古墳をたづぬふらく思を
致して其實を得ることあれややがてあつてつけうる及故古
革は龍のみちぬものうち俗耳おちりきりいづくを撰
出して遂に劍人をたづぬむ
○ちひ片言隻辞といへどもたづぬしき據を得ざるはいそぎ

○奇を好ぶまをばてありぬ虚譚を述考疎ありて口碑の誤
 を傳ふる説とおあどく見るとありぬ志くふあぬを予が
 考のあつらざるもあなりぬる後鑿を俟てあきつらたせむの
 ○凡正史といふもあむむを記るものハこみ中うあらことを
 むふ便をく函原氏物語ハそつこの書あれど其代のりやを
 考るハハれも引もちくるごとく浅井了意井原西鶴等がこえ
 れ書雜屋立圃菱川師宣等がこれ後のとくひもその代のち
 びさをもてかけるハいしをすれあつてさるごとくさるありて
 証とまへまきあなりその由多に俗書といふも實をたむし
 きハとりもちぬ引もちうる書名の下小上木の年號を志
 るをハそれくの時代を志すむむすたあり

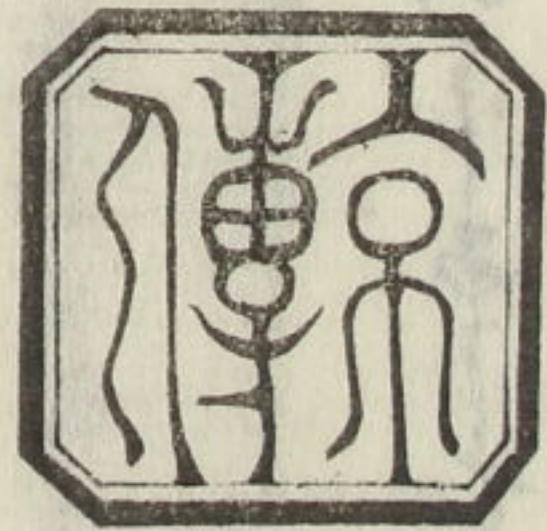
○おもひ得たる時ハそがうくかきつけたる稿本のよ上木
 ぬれついでをさめむいふこと前後一且りさあゆるもあ
 るべ一覽者あやむいふとふれもとより俗小近きをむ
 とそれハ目あれざる雅文目あれざる雅字をもちあむ識
 者のとあハらりれむことそあなりぬ
 ○證とまへま古画あれハ原本をまをさうつ一ありて露路なる
 マもたぐむであらハせり古圖あきハ其代のおむむことを考
 てあつたに画一む古圖と新画とハ画風を以てもち見る
 べ一古圖ハまをて予が自画あり覽者あやなりて予が筆
 のつたあきを画者あふさるるありあり
 ○此書をばてよりあつたをわづつけたるものハあれど今に

あつて百歳のいひやへをも又昔の質素をかたひて費をを
 ぶらむハをきくくもちる所あるありもあふじり後の
 世も今をいひてて志たふ人あふむさうかうぐへの便
 あらむ歟

文化紀元甲子春三月

江戸

醒齋誌



近世奇跡考總目錄

卷之一

- 一 懸想文賣
- 二 縫箔小袖
- 三 氣俣頭巾
- 四 夜入道
- 五 左甚五郎家譜
- 六 三谷馬駄賃附
- 七 山中平九郎鬼女話
- 八 丸山筒花入
- 九 土手道哲并高尾

卷之二

- 一 上野花見
- 二 六尺袖
- 三 浅草海苔
- 四 女歌舞妓うらみき太夫
- 五 高砂屋看板
- 六 土手馬
- 七 成瀬川土左衛門
- 八 相撲櫛
- 九 小歌八兵衛

- 一 佐文山戲書
- 三 宗珉一輪牡丹目貫
- 五 右近人形
- 七 羽生村累古跡
- 九 安樂菴落語
- 十一 鹿野武左衛門仕形話
- 十二 辰之助鎗踊猫狂言并肖像

卷之三

- 一 古画相撲圖
- 二 牛若木偶衣裳
- 三 淺草並木櫻并淺草寺船形水鉢
- 四 吉弥結帶
- 五 岡崎女郎衆
- 六 古代山葵擦圖
- 七 榎本其角傳

九 金龍山奈良茶飯

卷之四

- 一 夢市郎兵衛明石志賀之助事
- 二 秋色櫻并短冊
- 三 高尾所置兵水入圖
- 四 元祖團十郎傳并肖像
- 五 一蝶贈宗珉文
- 六 淺草六地藏石燈籠
- 七 淺草楊枝店始原
- 八 白炭忠知
- 九 三浦高尾考
- 十 其角雨乞句考
- 十一 芝神明千木櫃考
- 十二 薩摩手小平太
- 十三 英一蝶大津繪讚
- 十四 浮世又兵衛江口君圖
- 十五 大高子葉烟管筒
- 十六 深見十左衛門傳

卷之五

- ① 英一蝶傳
- ③ 蘆懸讚考
- ⑤ 十寸見河東傳
- ⑦ 万字屋玉菊傳
- ⑨ 腕の喜三郎
- ⑪ 加賀千代屋傳
- ⑬ 地黄坊樽次酒戰

- ② 朝妻船讚考
- ④ 助六狂言考
- ⑥ 竹婦人傳
- ⑧ 玉菊拳まげ
- ⑩ 鎌田又八
- ⑫ 大橋柳町考
- ⑭ 鹿藏猿次郎

以上 通計七十一條

目錄終

近世奇跡考卷之一

江戸

山東軒主人著

一 懸想文賣

淺井了意あさゐりゆういが曾呂里狂歌咄そろりきやうかおど寛文十二寛文十二年寛文十二板本板本曰曰往當正月元日の何何たより十五日まで。年毎ねごと無想文むせんぶんとて賣り。其出立いでだて赤あかき布衣ふい小袴せうはかまのそそははううくくまま。猶なほそそゆゆりり前まへハハ烏帽えがぼう子をこ忘わすれれるるや。中なかこころろハ編笠あむがさををかかうう。覆ふく面めんして都みやこの町まちをを賣うりり。是こゝをを買かひひ人ひとああれれハハむむそそをを紙かみの中なかハハ洗あらい米こめ二三粒二三粒入いれれるるをを。無想文むせんぶんををああげげてて後あとをを一い銭せんより百ひゃく後ごまでまで代うらハハ人ひとの心こゝろああままるるをを。扱あつかひひの祝言のいわいハハ買かひひるる人ひと。ありありりハハ夫おとこ婦めかけのかかららひひののりり。或あるひハハ商賣あきなひののりり。又またハハ物ものくくるる。その外ほか何なにももののををむむすすをを。ささぬぬぐぐめめででくくつつひひづづけけてて打うちちととあるある。と

懸想文賣圖

寛文十二年印本
曾呂里狂哥咄
古画模出ス

詞花堂藏本



山東博主人書

元禄六年板本
誑諧系層に
懸想文賣の
を考ふる狂哥咄の
説きかたなりけり
くふもト一ツ

かちりく。賣りる詞や。さしうきとえーを時世のありさぬおわしう

つそれ今ハ系絶りや。此ころ。さうき人ハあつらふはし。是ハ祇園

の犬神人ぬじんかんありや。又ハ桂かつらの里より出る男あや。そのおるおを知らざ

○按るに。懸想文とは。女め文のさぬあけらるものあはれ。紙符かじを懸想文と

あづけて。いまだ嫁よめせざる女の良縁りょうゑんをいのしものあゆめ。己お寛文の頃ころと

る。女文めぶん以て誑あざわらむ。○俳諧はいかいの季きよせ入いハ。寛文三年印本増山の井

みえりぐらむドめ。その以前いぜんみえりるあり

○二上野かみのの花見

此系一本このけいいほん云。東叡山とういざん黒門くろもんより。仁王門におうもんまでの並木なみきの極きよくの下した。花見はなみの

多おほ。松山のうち清水しみずのじろ小幕せうまくらより。らじしてえる人おわし。幕まくらの

か布ぬいき時ときハ三百さんひゃく余あまあり。さくあき時ときハ二百にひゃくあまり有あ。此外このほかおつゆ

ちくる女房にようぼうの上うへ点てんの小袖せうそで。男おとこの羽はわりを。糸いとあきけり。細引こまひきを

布ぬいして。極きよくの本もとおひつけて。かろの幕まくらおして。毛氈もうせん花はなひらりあきて

酒のむく物ハあり。小歌淨溜瀧踊仕舞ハそがむらりあり。本町通り町を始。肴徳あり。町々にて女房娘。正月の小袖云ハ仕立。花見小袖にて成。結搦。物。花より。花の。空。りて。昼。雨。山。又。其頃の婦女の小袖ハ結構といへとも。緒袖をかき。今より。甚。素。もの。

三 縫箔小袖

昔の婦女ハ。縫箔の小袖を礼服。京六条小傾城町ありし時。寛永の頃までハ。地。縫箔の小袖。島。

原ありしより。縫箔。其山。大鑑。延室中。好。物。今。残。緒。地。縫箔。唯。縫箔屋。名。残。古。代。緒。の。地。六。尺。袖。延。室。天。和。の。一。尺。五。寸。を。大。袖。云。六。尺。袖。を。一。尺。五。寸。四。合。六。尺。袖。春。臺。の。獨。語。お。ま。て。の。男。女。の。衣。服。ハ。極。て。質。素。之。男。子。も。女。子。も。十。四。五。五。ハ。長。袖。残。是。も。昔。ハ。一。尺。七。八。寸。を。極。り。せ。一。尺。五。寸。の。以。上。二。

四 六尺袖

延室天和のころ。一尺五寸を大袖云。六尺袖を。一尺五寸四合。六尺袖。春臺の獨語。おまての男女の衣服ハ。極て質素之。男子も女子も。十四五五ハ。長袖。残。是。も。昔。ハ。一。尺。七。八。寸。を。極。り。せ。一。尺。五。寸。の。以。上。二。



天和年間
上野花見番



尺がわり不あり。夫よりやうやく長くありて。近きは二尺四五寸あり
りぬ云〇蝶が四季繪跋きのあをむつのつと名りをもこえむ。やう袖大路かぢぢを
まらばこそ書しむ。延宝天和の頃も享保の頃と大に凡俗のうかりと
うらむをさるあり

五氣俵頭巾

獨語

江戸の婦女外ふぢよあおつろふ昔むかしハ氣俵きまをそくろき緒いとして頭
面めんをつみ目めむらうをあとつらら其後綿わたあて頭面をつみ

ハ我われ甘あまあまり宝永の頃までまらありま云いふ案あんらふ今江戸小
お高祖頭巾たかそかんと云もの氣きまは江中の遺製いせいあらん

五元集 目むらうを氣俵頭巾の浮世哉

其角

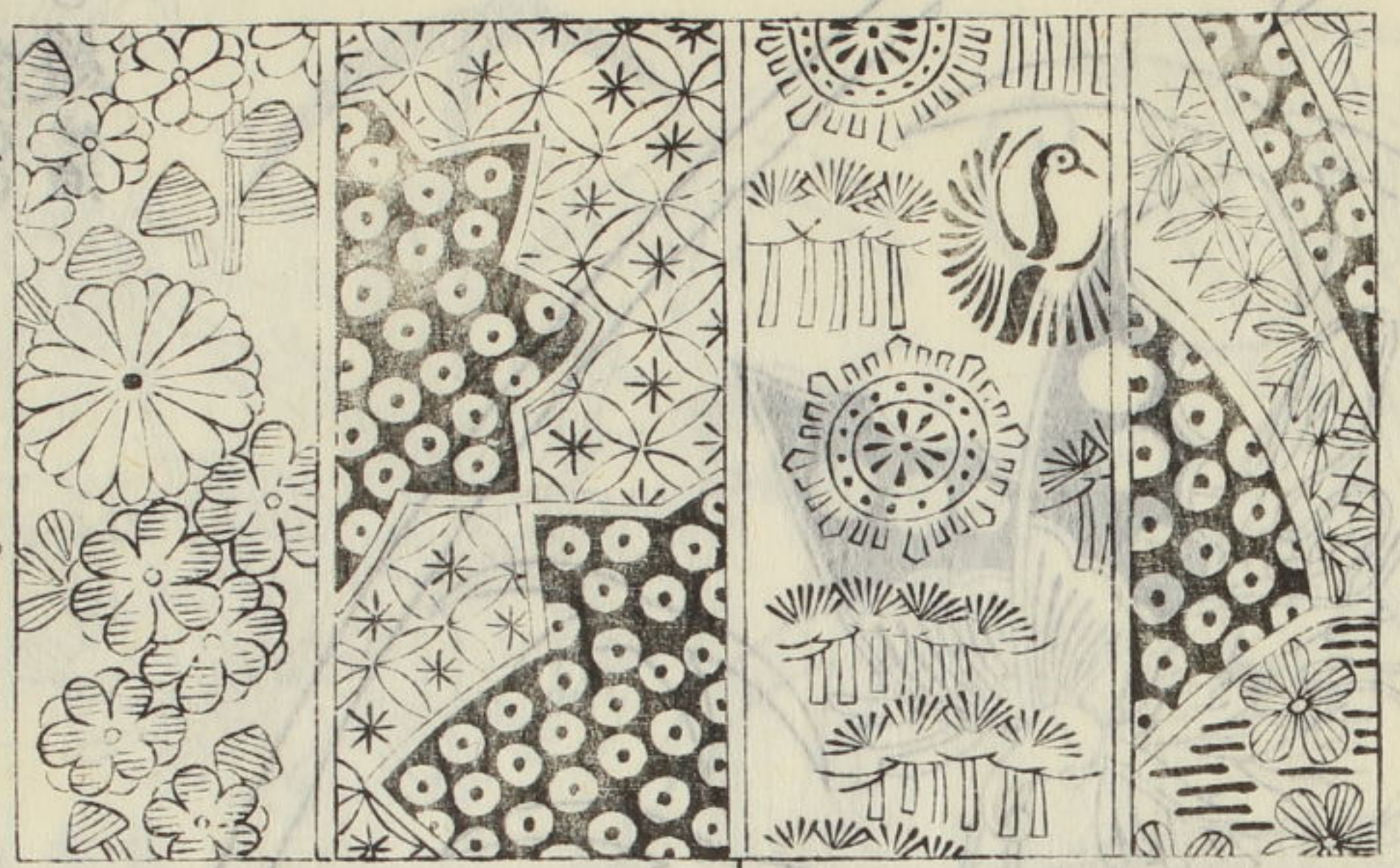
縫治

木村太朝藏

摺治

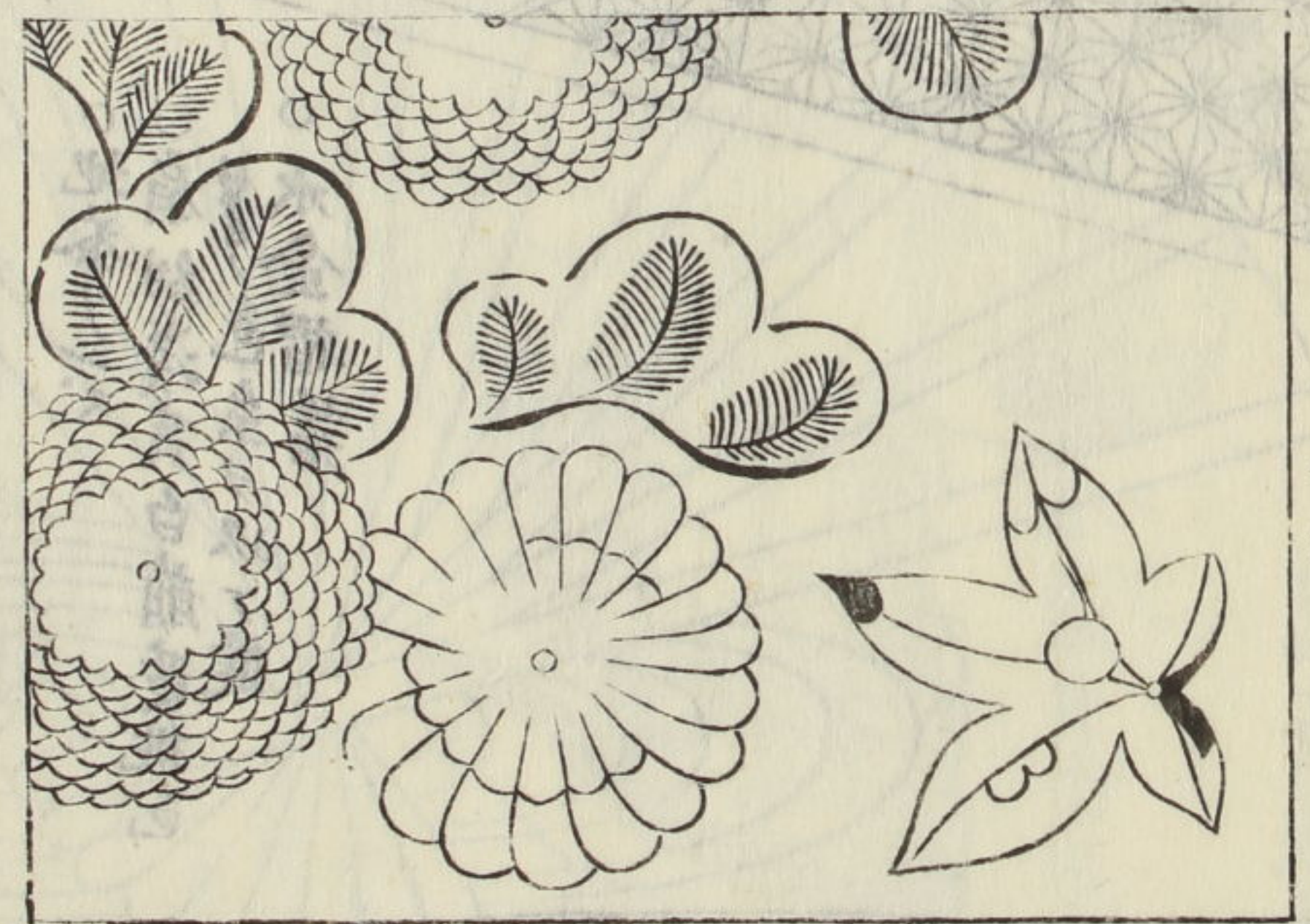
或云箔絵 印キニノ種類

山東藏



此へリ スベテ 治

地紫リニス。縹糸青黄赤。鶴リボウはな菊スベテ治



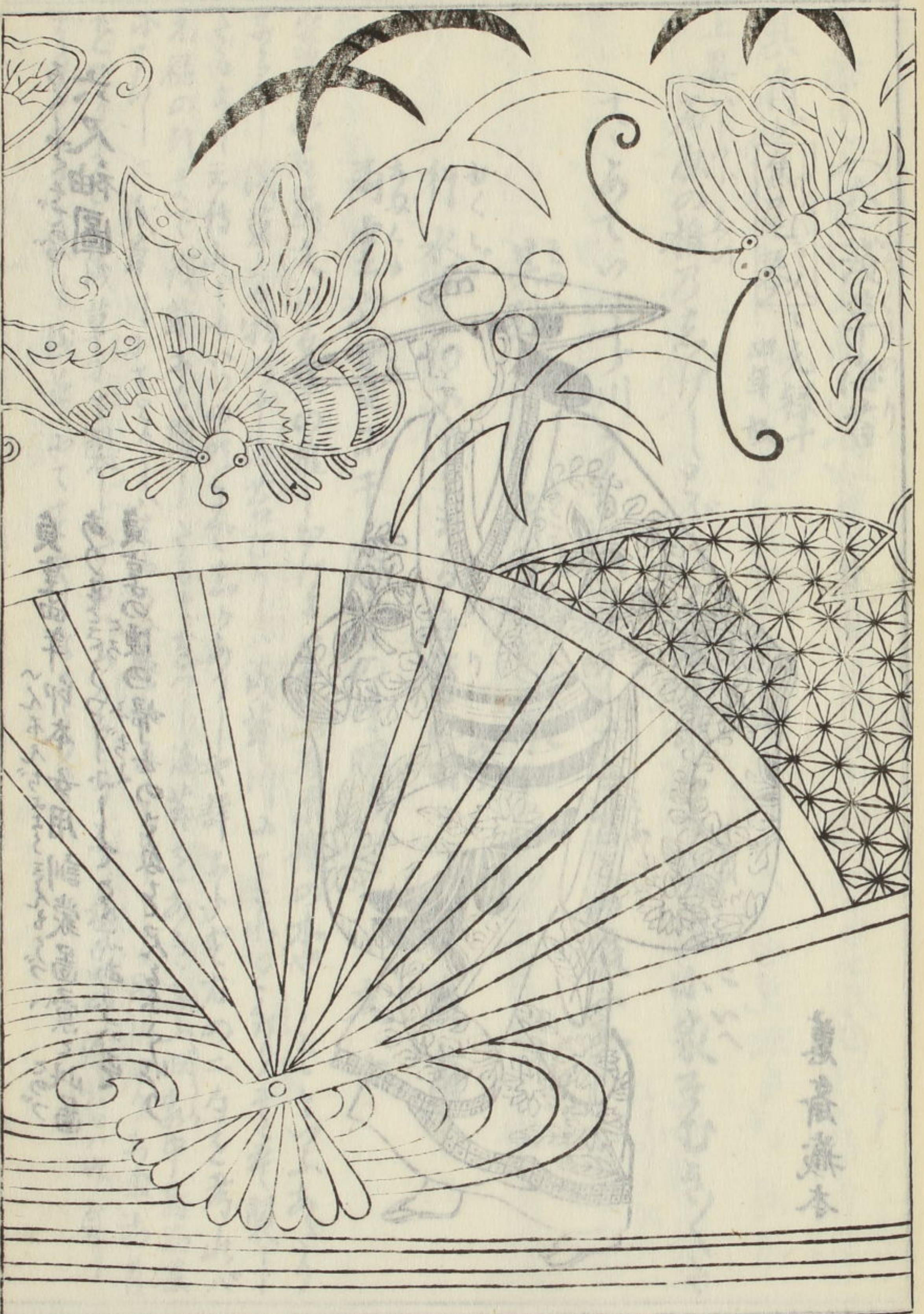
地白茶拵。地紋金銀治

○縫箔



○地茶リニス
 ○扇紺淺黄白崩黄桃色
 ○等ノ色糸ヲ以テ縫
 ○水金摺箔

木村氏所藏



木村氏所藏

六尺袖圖

貞享四年印本女用訓蒙書此圖ありしころついでしてふあふはそ貞享の頃の婦女のさぬとんふふなり



蕙斎藏本

六 淺草海苔

其角の焦尾琴 四年坂

上畧 石原の推乃まがーまに人目されある境ハ小家そむるくへてこめてのさし川すぢ枝漫しころ皆この流ふ入

其引

所の産を寄て

行水や何おまがまる海苔の味

其角

雨雲や簀お干海苔の片明り

文士

室事小右前文に石原の推とゆけ多ハ本亦石原推の本やしきとつふありありあふし浅草名物の干海苔むりハ浅草川ふてこ水をそりそき製しころより手付ゆむらつのはまを去りありや詳あふむ右の二白を考ゆハ元禄の頃まで浅草めて製しころとちがハ海苔をあきまふ上回中島茶葉小豆に浅草川ふてこりハさるるり遠きうとさし川よりあふ海苔をそりよめて浅草にて製しころハちんきりちり極品の海苔ハ廿年たり

七 へん 夜入道

目と目のれをみれば小君がくへまむー夜入るうらさきや

山の井

望目の影をみふく似たる哉と思ひ合す

後お似るるくもやへん夜半の月

離屋 立圃

此句正保の頃の吟

八 女歌舞伎くろくき太夫

そらろ物語

伏見一八テー原町大門通り

有シ時代 有て来ル三月五日くろくき太夫

かぶきをいふありき日本橋小高札をくろく江戸の名を傳へ女歌舞伎お
わーもつて中あもろくき太夫ハ世々越えぬかたちやきく客頼美處
ありりぬ此が舞妓をこそとて又あき老若貴賤くんど見物良し 同時
中橋ふく島丹後守よふ女身舞妓ありりよは日書ふ又白 予が骨董集二

右そらろ物語ハ寛永十八年の板本之 杏園 藏本

九 左り甚五郎家譜

仏殿山門等の彫物古雅多し来由一りくざらもみざりにたり
甚五郎が作ありそのいして名譽一りまつていつれの時代ぞ
水の所の人と云ふ詳み知る人あり其譜を得て始て時代
を知らたの如し

左甚五郎 伏見人寛永十一甲戌年四月廿八日卒四十一歳

左宗心 元禄十五壬午年三月十五日卒七十一歳

左勝政 京今出川寺町住 享保十二丁未年五月十三日卒

以下畧

元禄三年板入倫訓蒙圖彙示天正の以左りを号する名人あり云々
龜文公羽之左甚五郎ハ関東小ハ不兼播州明石に任りらまぞ

十 高砂屋看板

日本橋室町一丁目商家の軒の上に高砂尉と號の古き木偶あり
左り甚五郎が作と云傳ふ案も小原是高砂屋清丸と云ふ菓
子屋の看板之其菓子屋ハ貞享板の江戸盛子（小）のうなる舊
家小て宝曆の以迄ハさるる住一が他所へ轉宅せし時彼木偶
小靈ありて不思議の事（小）もあむく此地を去ることをしるふ
みよりてせんをさくさく小残一からぬ今ハ不用のものなれども靈
あることをおそれてそののけぞとぞさるものおもあつねど二百
余年を及する古物なりの火災をのがれて今も残るハわづら

十一 三谷馬駄賃附

むろ三谷通の若人等ハ白馬白鬃の刀白革の袴白くりの袖

るりあふまて白きを以て風流のうらも。寛文二年板 小歌惣ま

くりと云かみ。ふあうて三谷へ通ひ 駄賃附あり。左の如し

所より吉原近駄賃附の事

一日かきより大門まで 並にだちん貳百もん

馬奴二人こむろがーうたふがうり白馬駄賃三百四十八文

一飯田町より大門まで あまだちん貳百もん

ゆご二人あむろがーうたふ銚白馬駄賃三百四十八文

一浅草見附より大門迄 あまだちん百三十二文

馬子二人あむろがーうたふがうり白馬ならん二百四十八文

是白馬を好し 証人又明曆の頃の小歌也。春の日のいとあまけ

て柳をよるハくぬぐぞ。あまき馬あけらるるのこよとくうひはし。

白馬騎不行 章臺折楊柳と云。唐詩の句をやとらげたる歌ふ
又白くらの袖べりを好む証あり **五元集**に

袖裏や加よりけお白くり

具角

今の世歌 舞妓狂言六方丹前の奴僕ふ拾まるお白羊なり白袖
口白裏白キ帯をて用るるうふ古風の残れるありと

十一 土手馬

浅草寺境内ふ馬道と云名の残れる三谷の通路あるやえ

五元集 朝嵐馬の目でゆく頭巾哉

其角

日 土手の馬くらんをひげふ茶つみ哉

日

右の白お土手馬とくろも三谷馬のうへ今日本境ふ立て船く
よふ船人を土手馬とつひ嫖客おつきて揚銭さう不行日雇の

者を付馬と云もびりの遺言あり

十二 山中平九郎鬼女話

善世ふかろ話あれどもくろくろく傳へてつふ山中平九郎一時
我家の二階お上りて鏡おむくひ狂言怨霊の顔をさぬぐお工夫
とやせんやとて眼をよせ口を印し心お学ばせてお
くわらひをこじ自然とおの水もおそろきむらりの仕を
工夫しかくてこそよけぬ鏡をよみおらておねえお立上り
怨霊の身ぶりをみる折し其妻の心もあく二階お上りおれ
けむ其ありさぬを見てこやのうとさけびのけさぬおれ
て死入りぬ家内の者その看おむらきて二階おありまう氣付
まぬあつてさうくしてややくいさぬ平九郎思ひぬ我

菟う積身せきみお入りて我妻わがつまをさうかろのこゝろ。いんや他の見物けんぶつをやら。ちよららと人ひと則すなはちも工夫くふうを以て狂言きげんせしに果はて見物群集けんぶつぐんしゅうせしとぞ江戸著聞集えどしやくもんしゅうより書かき妻つま急隅田川いそよまたがわと云狂言きげん彼妻かのつまが絶ぜつ入いせし時の工夫くふうのよりをかけるひ非ひあり。それより以前いぜんのよりより。いづれの狂言きげんや。詳つひあり。案あんるふ平九郎へいくわんの實じつ悪あく古今ここんの名人めいじん俳名はいなとを仙家せんかと云元禄中げんろくちゆうを盛さかみ経へて享保九辰年きやうほくくわんねん五月十五日ごがつごじふごにち没な谷中やちゆう常在寺じやうざいじ日蓮にっぜん小葬せうざうる。法名ほふなを冷山院れいざんいん壽仙じゆうせんと云予が骨董集こつどうしゅうより平九郎へいくわんが首くび像ざうとありハせり

十四 成瀬川土左衛門

享保九年午六月きやうほくくわんねんうしづか深川八幡社ふかがわはちまんじや地の相撲ままひの番附ばんつけを見みし。成瀬川土左衛門なせがわどざゑもん前頭ぜんとうのいめあり。案あんるに江戸えどの方言かたげんお溺死ぬれしの者ものを土左衛門どざゑもんと云成瀬川肥大なせがわひだの者ものや急いそ水死みづしして渾身こんしん暴あり

ふりうらると土左衛門どざゑもんの如ごとしと戯あそつひいづつひよ方言かたげんとありしと云八百屋やちやうお七しちの狂言きげんお土左衛門どざゑもん傳吉でんきちと云あるも成瀬川なせがわが名なをかり用もちらるものぞ。以上友人照義ていぎの説せつこ

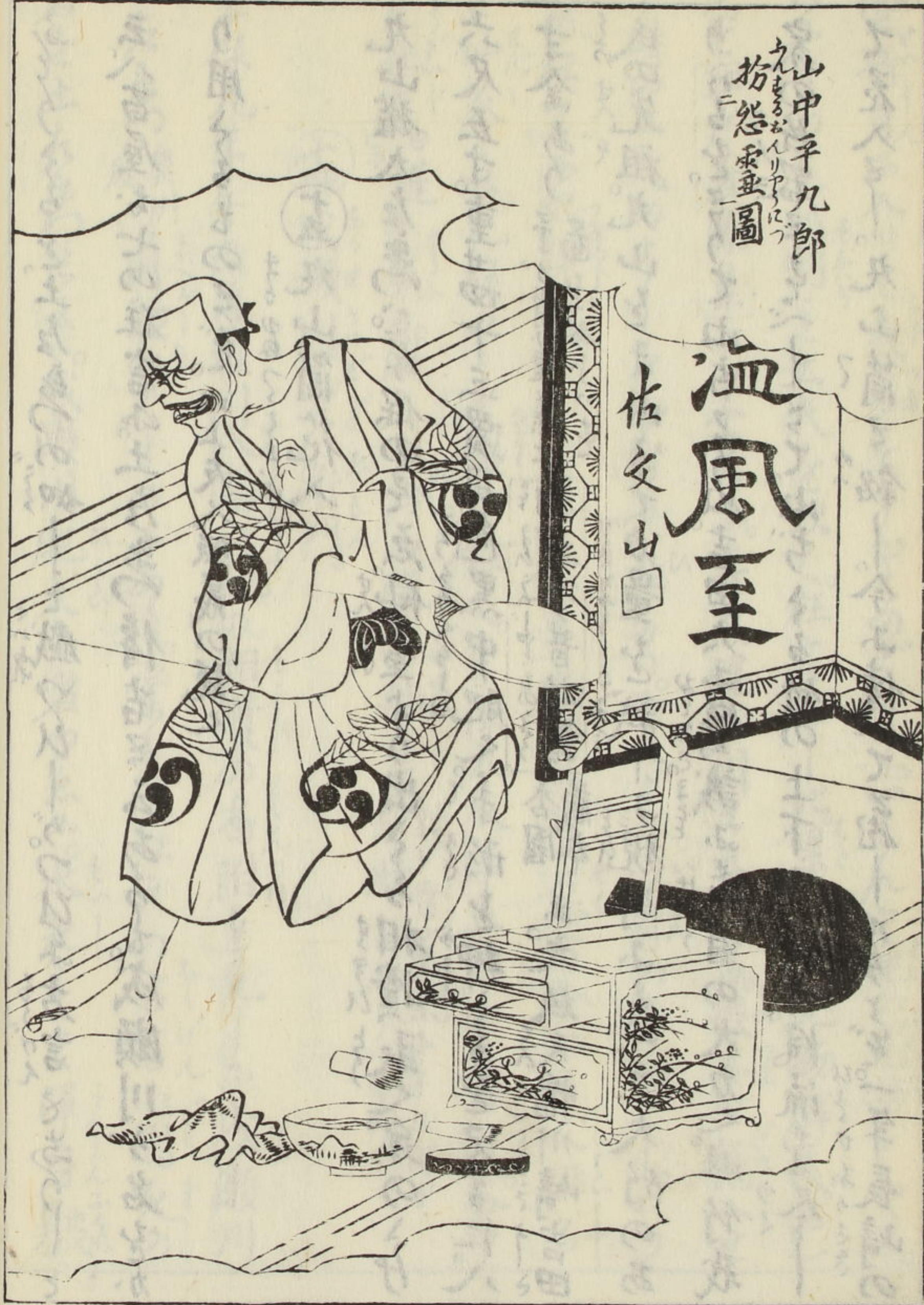
十五 丸山筒花入

丸山権太まるやまごんた左衛門ざゑもんの享保きやうほくのとき仙臺せんたいより出でる相撲ままひ取とり身みのはけ六尺五寸ろくしちごしゆ重おも廿四十三貫目にじゅうよんじゅうさんくわんめ色いろ黒中肥くろちゆうひ之の手形てがたをおしを多おほくは八寸余はちすんあまあり予が骨董集こつどうしゅうに相撲ままひ今昔物語いませきものがたり杏園きやうえん云大坂おほさか天幡川てんぱんがわ崎吉田さきよしだ氏の先祖うぢのせんぞ丸山まるやまをまぬまてり力量りきやうをこして規竹きちく不ふままべま大竹おほたけのありらるをこりてぬぢぢららぬ吉田よしだ大おほ驚おど誠まことお希有けいゆうの大力たから也。此竹こゝろ我家わがやの珍器ちんぎとまままべまてりぬぢぢららる竹たけの上下じやうげをこらへ風流ふうりゆうをまままてりて花入はないり也。丸山筒まるやまづつ銘めい也。今いま傳でんへてる也。一ひと年ねん長崎ながさきの



山中平九郎
 九郎おんりやうに
 坊怨重圖

沍風至
 佐文山



相撲ふ下り。彼地ふて才まうりぬ。因不浩臺寺と云禪寺に奔る。長
 崎の入口日見峠と云道の明くつ小墓あり。法名丸山良雄信士
 丸山曾ていふまゝ丸山痛ありて。山のこころありしゆゑ丸山と云墓碑
 のかいらと云まかちふつくり。痛のこころを石をわけりて云まかちぬ
 蓼太撰 蓮華會集

一つうみいさまうりせん年の豆

丸山権左衛門

十六 相撲櫛

元禄の頃を盛りふ経る。兩國権之助と云お撲れ櫛をさし始
 一より。そは前髪あるお撲取櫛をささるり。そやうて鬼勝象之助
 面ふ白髪をぬり。二枚櫛をさしりより
 相撲大全 小ふりぬ。何のや
 小あうせしと云ふ。そは前つけと云ふをささるり。そやうて彼
 そゆをつたあきさるり。そゆをつたあきさるり。証として。櫛をさしりより

此句 文蓬萊 小ふりぬ。鬼勝が身まうりしをゆみり白と云ん

沾徳

○兩國権之助 因幡。丈ヶ六尺一寸五分。鬼勝象之助 紀伊。丈ヶ七尺三寸
 重サ四十貫目 重サ四十二貫目

十七 土手道哲并高尾

吉原魚の尾引 延宝六 堤のたつたにゆかさるある菴あり。是をいふ
 ともた。さうし明暦の頃より。た哲といひし心者世をむつりく
 や思ひん。おもちをさした。さふ菴をあん結びて候。二六時中
 鉦の声とえせと。ゆふつりゆふさえて。いふちも哀をもよふさぬ
 あり云。紫の一本 天和三 小。日か境のまじふ。た鉄が音あり。あるもの
 小淋しきをた鉄が鉦の声をあり。今と會百作がりの小奇ふそ
 つちでうてた鉄が唱と此音と云 事跡合考 延享三寫本 小今戸橋
 杏園花本

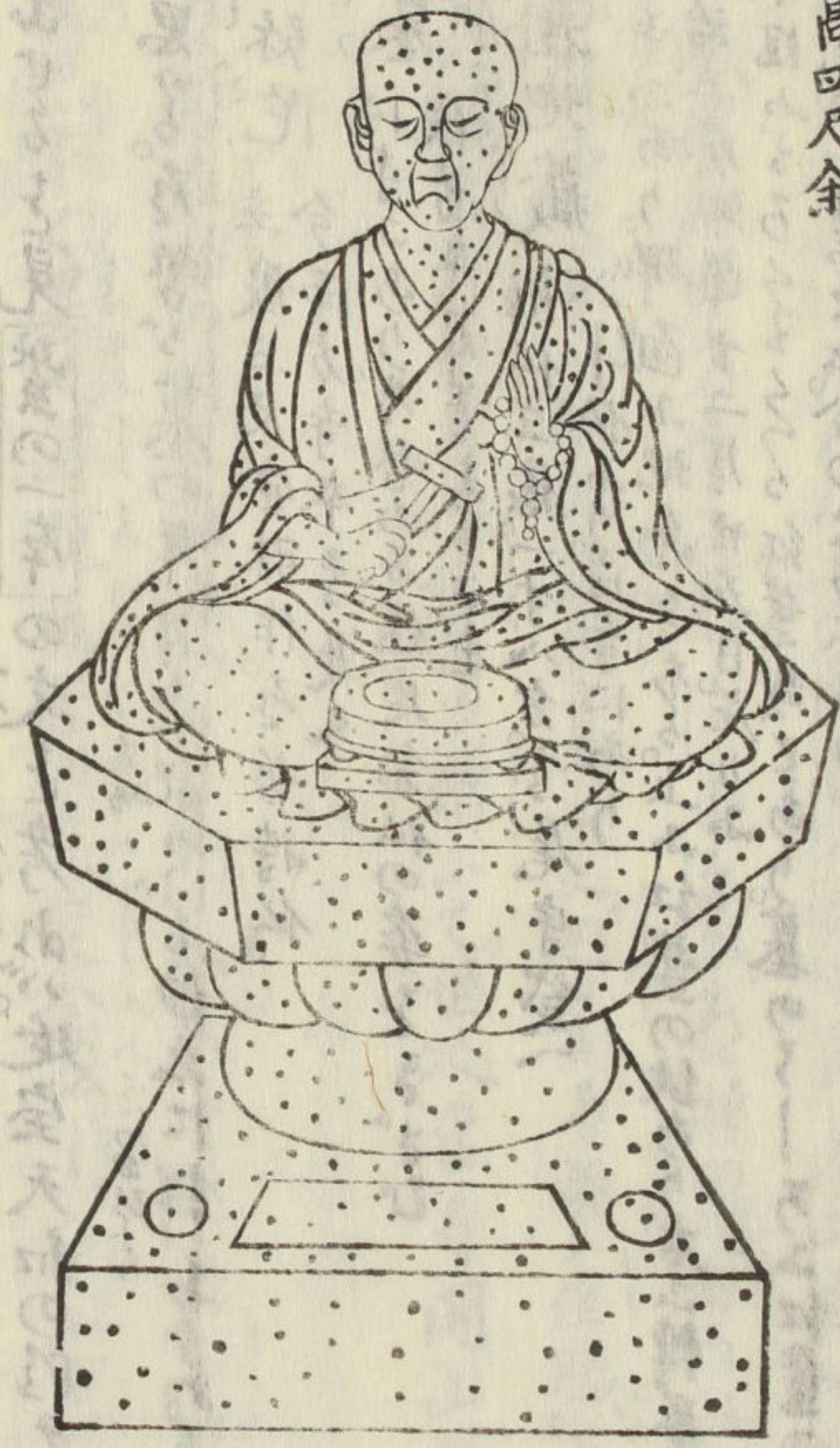
新編越の南木戸きんへん西方寺せいほうじ云々其の前まへが土高とこう所空地ところくわち也。十間斗しゅうかんりの長さ幅くわん二間にかんなりりもあらん所昔むかしつみんを刑けいせしれり。その時ときに哲てつと云いふ心者こころしや。彼罪人かのざいじん弘果こうくわ得脱とくだつの爲ため。小昼せうじつ夜念やねん仏ぶつ一いつはり。其後そのち此西方寺このせいほうじ小尊せうそん持ぢり。由よし念ねんふ。其哲そのてつの唱なげあり云い。右涼説みぎりやうせつ。小弘願山せうくわんざん専祿院せんりくゐん西方寺せいほうじ。開山かいざん念ねん言ごん上人じやうじん之の巡めぐ行ぎやう及およ哲てつ住職ぢゆうしやく小せうあつ。常念じやうねん弘こう發はつ起きの願ねん王おう及およ心者こころしや。徳とくある僧そう也。世人じやうじん當あた寺じ開山かいざんのやうに云い。其ゆり云い。

案あんふる。其哲そのてつ在俗ざいぞくの時とき。三浦さんぼ屋やのう尾おが私夫しふあり云い。其妄説まうせつ之事跡じじせき。合考がうかうの説せつのごとく。罪人ざいじん得脱とくだつ板いた苦くの爲ため。定念ぢやうねん仏ぶつ一いつ。其小吉原せうきちげんのごとく。トとざる以前いぜんより作つくり。心者こころしや多おほき疑ぎあり。土佐とさがごとく。三世さんせい二河にがわ白はく道だうと云い。其尾おを哲てつが教けう化けふよりて成なり仏ぶつ一いつ。其よりごとくを作つくりし。

- より虚妄きよまうを傳つたへ。あつん。予西方寺せいほうじ小せうりてとづぬ。其哲そのてつ万治まんぢ三年十二月廿五日。高尾たかお同日どうじつ小寂せうじやくと云い。其その尾おを引ひふ。其哲そのてつ菴あんの首くびを出だせると見み。此この案あんの一本いつぽんの文ぶんを考かうべ。延宝えんぽう天和てんわの頃ころまで。あつり。アあやふ思おもふ。其哲そのてつが墓かぶの年月ねんげつを記しさる。其尾おを引ひふ。其哲そのてつ持ぢり。
- 汗あせの弥や陀だ 立像たつざう三尺。安弥あんや作つく。其哲そのてつ持ぢり。今いま西方寺せいほうじ本ほんを是こゝに。
 - 道哲だうてつ之の墓かぶ 曰いは寺じ小せうあり。其哲そのてつの石像いしざう。定念ぢやうねん仏ぶつの姿すがたをさざむ。法号ほうごう年月ねんげつ等らうあるさむ。
 - 高尾たかお襟えり掛かけ地藏ぢいじやう 洞どう仏ぶつ立像たつざう。一寸いちゆん八分はつぶん。其尾お守し袋ふくろ一いつ。
 - 同墓どうかぶ 曰いは寺じ小せうあり。碑いし面めん小せう地藏ぢいじやうを有ある。上うへ小紅葉せうがふの紋もんあり。右みぎ小轉てん譽よ妙めう身みん信しん文ぶん。其尾おの紅葉もみぢと云い。今いまのハ若木わがきあり。
 - 同位牌どうゐはい 曰いは寺じ小せうあり。法名ほふな前まへの如ごとく。
 - 同取持どうしよぢ羽う子こ板いた 曰いは寺じ小せうあり。下した小面せうめんを有ある。

道哲墓之圖

總高四尺余

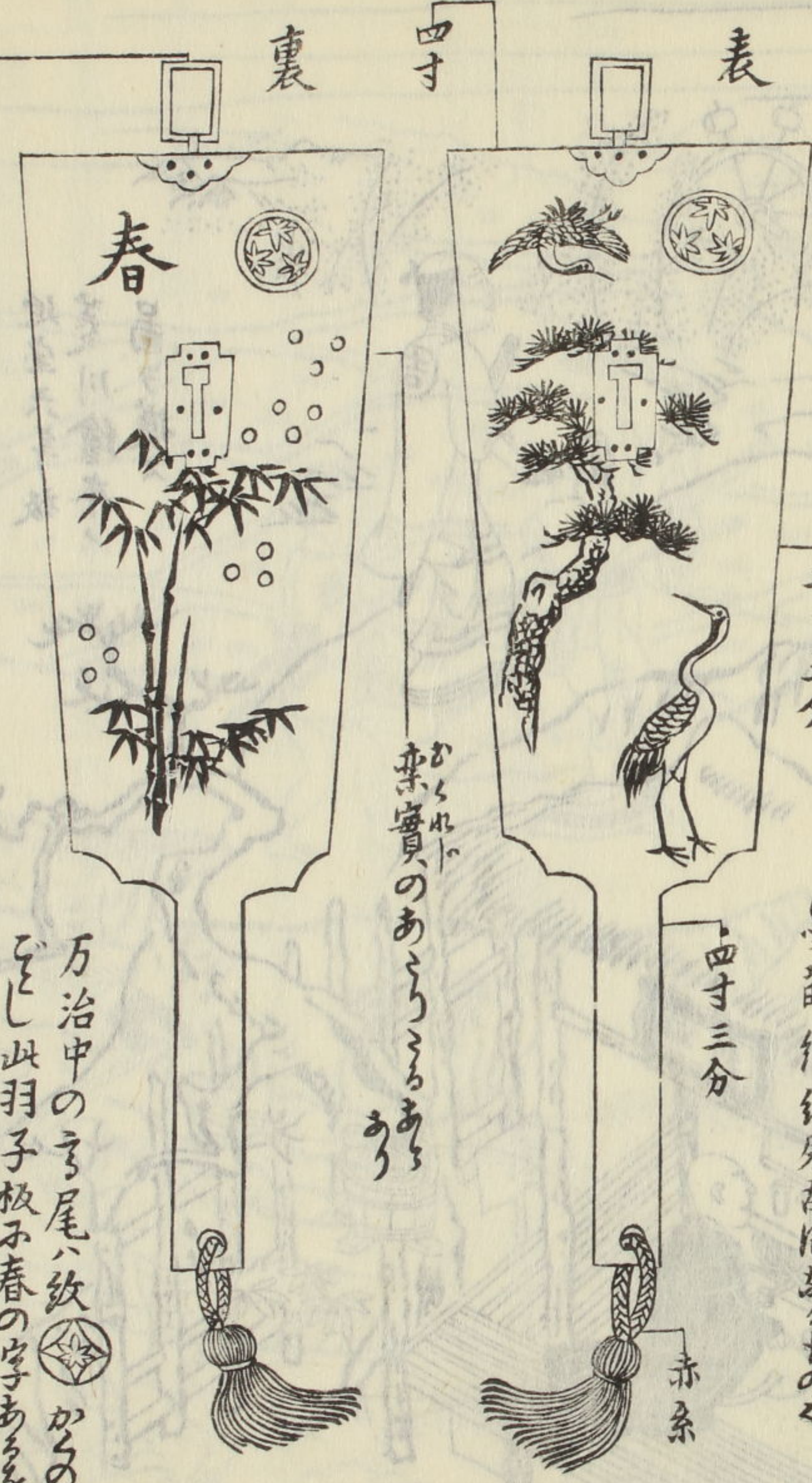


高尾所持羽子板圖

七寸五分

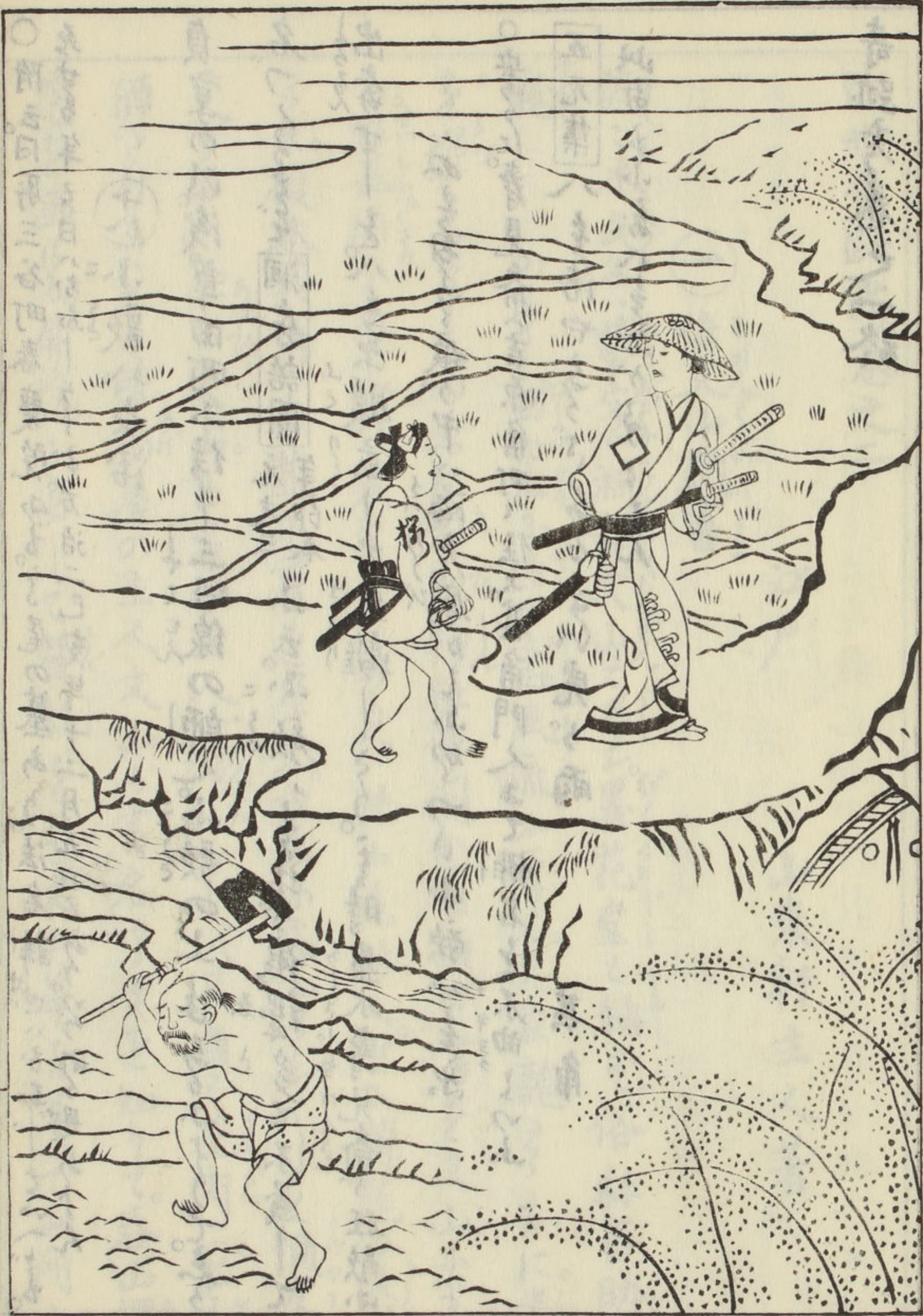
四寸三分

赤糸



此金具ハ後ハつけて垂撥ふもの

万治中の高尾ハ紋
此羽子板ハ春の字あり
此羽子板ハ考あり



近世奇考

卷之二

二六



とこのまうてつあんのかつ
上手道哲菴圖

延宝六年板
菱川繪本ノ
呂ヲ摸ス

近世奇考

卷之二

二七

○附云。日所三谷町春慶院にも。了尾の墓あり。法名詳世にかぶるこいへども。死せる年と日にかぶる。万治二己亥年十二月五日とあり。ゆづり懸あつん

十八 小歌八巻清

貞享の以。浅草田町小住一三味線の師。小歌の上とある。ふりて。ある

名づくること。洞房語園元文三年印本小云。小歌ハミユラ娘。釋多々不交して

出奔せしを。ハミユラ腹立して久離し。時並水壽見齋が狂歌小

ぬもあつ娘が中海老尾かもしふつ。小歌ハミユ

○案。に。壽見齋ハ吉原角町に住ス。其角門人にて俳名と不曲といふ

五元集ハミユラやあつさあつまい虎が雨

其角

此句も小おハミユラとあ

奇跡考卷之一終

近世奇跡考卷之二

江戸

山東軒主人著

一 佐文山戯書

佐木氏名。龍装字。淵龍文山号。墨花堂と稱す。俗稱百助。玄

龍の弟。西の注小住。志風流。厚く。兄玄龍。とくに書

を以て名する。由。都鄙神社佛閣の匾額。皆書を文山小も

む。世甚酒を好む。醉裏筆をみ。殊に絶妙。世に醉龍の後身

云。榎本其角ハ玄龍小書を子。由。文山。とあ。く酒友の

交りふりし。一日文山。富家の主人。一説。かよび其角。花街にむ。

酒。けあ。ある時。揚屋の主人。文山。書名。了。手を。知りて。春山櫻

花を。画。屏風。と。出。て。賛。辞。を。乞。文山。筆。を。とりて。此。所。小

便無用と書す。主人これを見て頗不與の色あり。其角筆をこく。こみつぎて花の山と書つひ俳諧の一句ある

此所小便を用花の山

主人大に怒りつひ家室を去。其にあづぬ童の口をさき。此小便を用佐文山とくふれりるを

此事世に傳へて風流の語柄を。文山享保十年乙卯五月七日病て没す。享年七十七。芝増上寺塔中浄蓮院に葬る

(二) 紀文傳

紀伊國屋文左衛門ハ材木問屋を家業として。世にさこえ。豪家之性活氣ありて。常ハ花街雜劇おぼびて任侠をこく。千金をあけりちて快くを故に時の人紀文大尽と稱して。嫖

名一時ホ。室永の頃まで本八町堀三丁目見て一町紀文が居宅あり。毎日定りて。是はし七人づ来りて。是をさす。二客をむく。度にあしき事を志さくも也。此一事をもつて。それ豪富あるを知ら。まは紀文が家小出入せし。是の子孫今本八町堀二丁目ありて。此事をか。又一時揚屋町泉屋平四郎かともて并小粒金を入て蒔あ。云伝ふ。正徳の以家おとろへ剃髪して。深川八幡一の鳥居の辺小住。享保十九年四月廿四日。其隱宅小かいて身まうぬ。深川靈巖寺塔中浄等院を葬る。法名を帰性融相と云

五元集 別まどや八乙女 樂男より 其角



紀文追ひ難う

巻之二



紀文追ひ難う

紀文追ひ難う

巻之二

同 病起 千山ヨリ菊ヲ得て

同 大母衣のうしろを柙や瓶の菊

同 隅の菓を添ふこそ水く人五月雨

同 千山亭にて

同 老の眼や土用干

同 悼紀文也父

同 子あやうやうとちやどる藤のう

同 紀文ハ一代の富家ありまかふ人おわし。已不父あり。父紀州熊野上を

同 江戸小いにて一代小まみりやとぞ

同 菊のちり 三徳の摺も水きりすて裏の菊

同 香非時 小其角一周忌に紀文が手向の白あり

同 黒方や年ハ経れとも臆月

同 類柑子 小風流をさそめきの飛花を惜むとめさそ左の白あり

同 今もハま錦繡の人よふこそ

同 紀文がうみつてさそめきの奇談あれども人口不傳ふるのこ。たし

同 ある証もあけられ。そにちりつ

同 後ハ昔お語山寛延の以。俳諧

師存義 小細町より保川ハ隣一のも居の北側ふつ住。其菴ハ紀文も衰

へて後作りら家あり云々。つら。話ありハ記。かまら

三 宗珉一輪牡丹目貫

宗珉横谷氏。名ハ友常。遊菴を号す。俗称次々浦。檜物町小住も。一

輪牡丹の目貫を云ハ。世ハ一具の名物也。傳へて云。宝永の以紀文宗

珉ハ牡丹の目貫をのぞみ。手附金十兩をかくり。三年返らふへま

ふ。紀文待侘て。あきりハ催促せり。ち仕方宗珉が意をか

かきとて。手附金をもどしぬ。其後や返てあり上りころを。を

紀文とあしひらる富家某あふ。某。金五十兩を以て謝物と云。

宗珉。それより生涯一輪牡丹をありむ。ゆゑハ世ハ一品の名物小

よしとぞ。宗珉享保十八年夏身まうりぬ

彼目貫。某氏の秘花あるを。友人戸張氏。去ハ一着して。露をうら

右近源左衛門舞圖 古画ヲ摸ス



元禄六年印本
四場居百人一首
此畧アリ摸出ス

坊主小毛湯

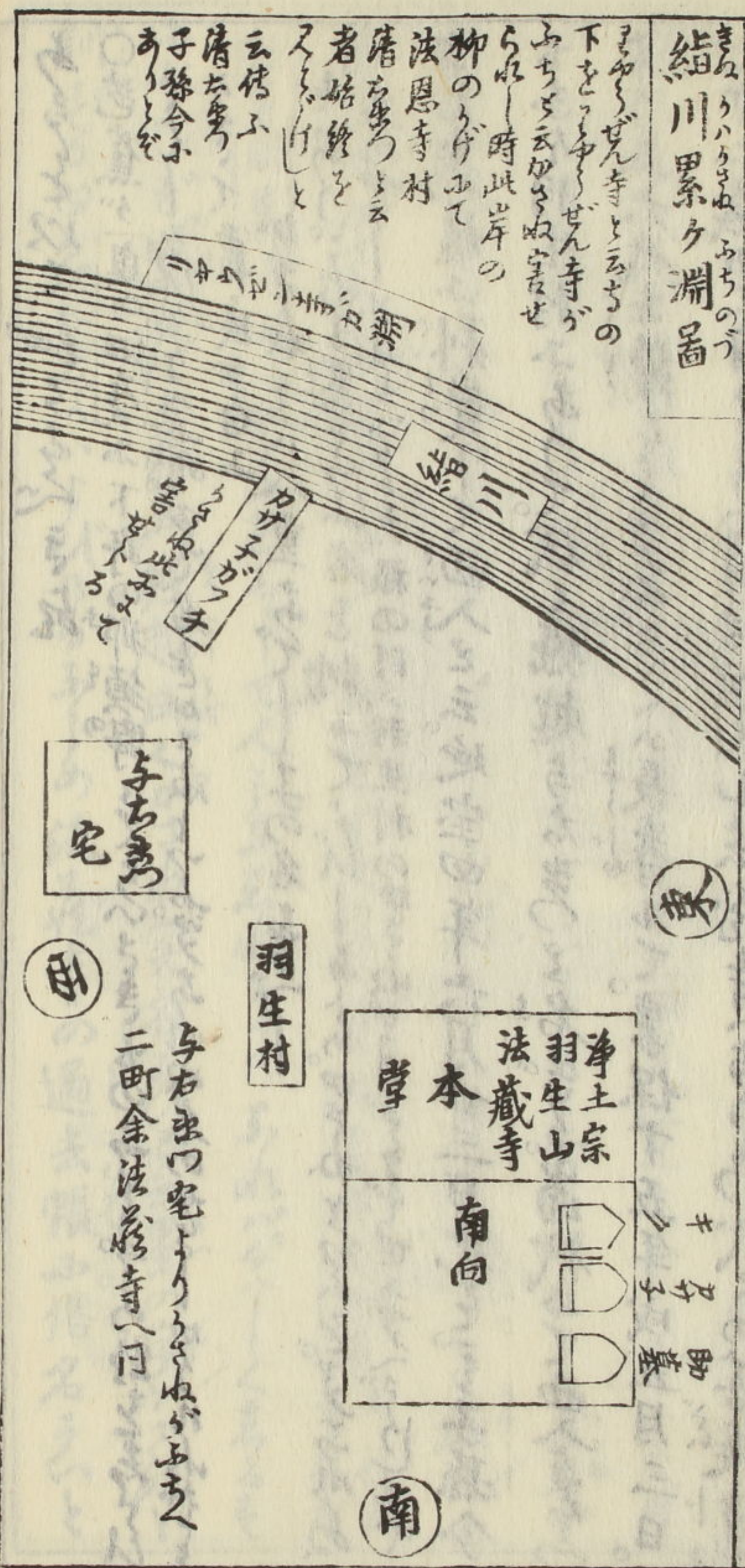


上ニ狂哥アリ畧

談洲樓藏本

理屋松貞信女 俗名ろい行年三十五 正保四丁亥年八月十一日。初法名香譽妙林
 單到真入童子 俗名助三歳。寛文十二壬子四月十九日此年号八助
 榮譽言不生妙樂信女 俗名きく行年七十二 享保十五庚戌五月三日

結川累ヶ淵番
下をいん寺と云ふの
ふちと云ふいん寺が
らぬ一時此岸の
法恩寺村
清をいん寺と云
者姑終を
云信ふ
清をいん
子孫今ふ
ありと云



八 歌比丘尼

殘口之記 歌比丘尼むり 脇掖一丈運小巻物入て地獄の経説一血
 の池のけがれをいませ不産女の哀を泣きさら業を(年)菴の戻りに
 烏牛王配りて熊野権現の妻觸めささけしげいつのわがよりうらか
 白粉尾紅つけて付長兵帽子に帯て廣く成一云下畧 東海道名
 所記 石治中云比丘尼どか二人いで来ておをささけふ頌歌すも
 けり水ぞ丹前もやふしありてたぐありくささけしひきぐ
 りさむらむら次小柴垣 明曆中さやんもとん山の女の奴ごの踊歌
 ありを比丘尼籠下のせてささけふささけの眉わさく薄化粧一歯
 雪よりもあるくくろき帽子めて頭をあぢふつむ云下畧かぬ
 熊野比丘尼の風万治の以てや変りたり



累然靈圖



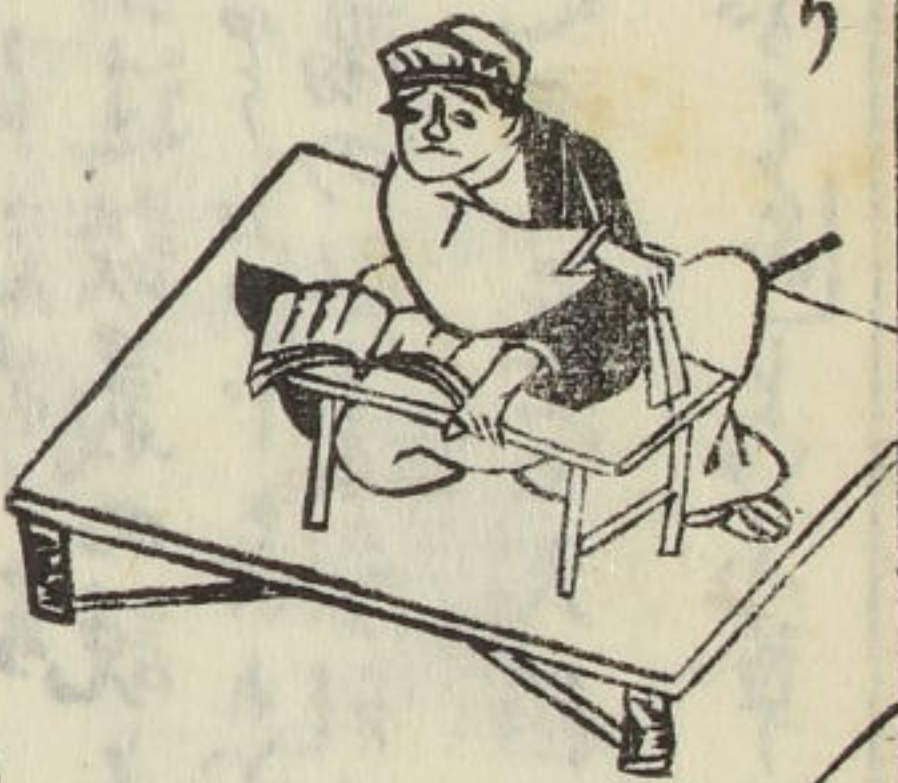
享保十三年卯本 檉雨の梅 此画あり
まことしうしやてあつた

人州也

あつた

乃

五



天満宮

如蘇架

琴松

延宝五年板本 から水呈ふ

庄あひかろが身おちらる初書

まんどろ 志の冒の露や質おくらん

案るふ。此自屋切が身おちらるるの事。露の五郎を案が。延宝あり。西より延
て。連舟師が。露とのふ字を質おくらん。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。
類相子。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。
上るのり。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。

士 鹿野武左衛門仕形話

元禄の以江戸。坐敷仕形。延宝とつふ。おとある。長谷川町の。鹿野
武左衛門のふ者。上より。鹿の巻筆。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。
横山町三丁目。休慶。中橋。加羅。小左衛門。同不。加羅。四郎。存ふ。
みふ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。まんどろ。

戸圖鑑不人也

近世奇林号

卷之二

二



同書三の巻ニ
此画あり

木村大徳藏本

三三三三三



元禄四年在言本
四季御所櫻三の巻ニ
此画あり、まことついで
はゆかりもふえま
ひとせり

京川津山白藏本

三三三三三

元禄十三年板本
 此画アリ是スナハチ
 辰之助ガ肖像ナリ

木村太朝藏本

木村辰之助

奇跡考卷之二終



近世奇跡考卷之三

江戸

山東軒主人著

一 古画相撲圖

下におありは相撲の古画。時代詳あり。画者四明といふ人。又詳あり。後の明鑒を俟の。相撲大全を案する。山州干菜寺八幡宮再建。正保二年六月。下鴨會式の内。十日之間。奥行也。是京都勸進相撲のころ。江戸。寛永元年。明石志賀之助寄相撲と名づけ。四谷塩町にて。晴天六日。奥行也。是とめ。大坂。元禄五年。袋屋伊右衛門云者。南堀江高木を橋。助立花通り。始て奥行也。下の古画。かこい。見物の意。ふり。て。又。神事相撲あり。寛永中。江戸。糸屋町。あり。勸進相撲あり。寛永二十年。印。あり。勸進相撲あり。寛永二十年。印。あり。



古画相撲圖 縮景



四明山

右後の上左右此置あり一紙ふ
をさしあつざるを以て別あり
合せたるべし

後の上右



後の上左



武清所藏

二 牛若木偶衣裳

家翁曰操芝居牛若の人形歌舞妓芝居牛若扮たる衣裳など。
鳥居土垣三本杉の模様を付ざれば牛若と見え今ふあつて
あれど其本標を知らぬ人まぬ昔土佐の芝居人形を以て能を
こ間ふ浄福橋をかくりりるが寛永二十年板あつた物語曰年板吾妻め
記を以牛若の人形ふかの模様をつけし。これ幸若のくつもの。

上ふあつたて置のこころ古器を存せり。又る所不調法の物にて。今この世
の人誰うかる不便ある物をもちて。昔人の老實ある風を容
しつるべし。藤網がもちたて。寶否ハあつたて。何みず水目あれ
ざる物じき器こつて。又云。むじの料理ふ。さかき膳といふあ
りて。今もいひ日ふ。大根をへぎて。さかき膳をつくる。彼器その大根
をわろまふ。あつたて。或人云。勝武革にへかみ。さかき紋あるを。山葵
おじと称す。彼器の形より云。いせーあつたて。さかき。あつたて。云。

七 榎本其角傳

寛文元辛丑年七月十七日生る。榎本ハ母方の姓と云。本姓ハ竹下。内ト云
其瓜菴父を東順と云。江州堅田人。始医を以て。某侯不仕へ。辭して後
隱者とある。曾和歌連歌俳諧とく。心。由良八郎左衛門元禄六年
正春を師とす。

八月廿八日没。享年七十二。芭蕉菴母ハ貞享四年四月八日没。其角

幼年の時。神田右むが池ふとみ。幼名を源助。一ニ源藏ト云。又とつひ

とぞ。村薩翁 延宝のころ。桃青門ふ入て。俳諧を学。山 五元集

みえぬ。十四五歳の 延宝二十歌仙田舎の白合 等ハ螺舎あるハ螺子と

あり。初名あるべし。蝶とがかけの賛。螺舎其角 匠の原ハ麒麟角と

もかけり。江戸麻子。江戸置鑑 等ハ亀鶴とあるハ誤。あつたて。晋其角

と稱せ。ハ易经 晋其角とあるふとつつけり。宝晋斎ハ采元章が硯

不鑄。文字之。其硯を得て。宝晋の二字。宝井晋子と云ふ。よくかふ

つと。佐玄龍。通額をかゝあて。菴ふかけ。則宝晋斎と号せ

一ハ五元集にんぬ。幼年より儒を寛齋先生。小字ハ。医を草

刈。某小字ハ。医道の名を順哲と云。其瓜菴詩を大顛和尚。小字ハ。

其角
玄竜
学
ゴロ水元
章
リ後
ヨル

書ハ玄龍ふ子て後一家の風を承^レ。画ハ一蝶ふ学びぬ。曾てぬふ町
 實名堀^{木履}を商ふ家のくつふきみて狂面堂^{三号}を。貞享の以
 江町^{此時服部}破笠^{此時小川}等其角と同居せし。破笠自記
 山雪^{平助ト云}
 かぐび古栢庭日記^{老のふみ}写^本等ふん内江戸鹿子^{江戸昌鑑}
 等不其角が住所。堀江町とある。則てぬふ町のう之。幼年より此不
 小住しと名ぶし。元禄三年板^{つを昔}小居をう^アしてと名きて
 鼠^{あもやがて}あドまん冬^{あひこり}籠^まあぬ。元禄三年の冬。てぬふ町より。
 いづくへ^{えん}轉宅せしあり。五元集に神明町小居をしめてと名きて
 行合の松^{もか}を^{そぎ}か^ぐり竹とあるを。考るふ。てぬふ町より。神
 明町へ轉宅して。あくる春の句あふん^{皮笠}摺^お。六月廿日居を^{しん}持
 トて。竹三竿^{をう}をう^えつけ^るる^あ頼^あふ^わと^ろび^るる^こ声^{あり}て^そか

きて。句あるハ。元禄十一年のう之。あふぬ。元禄十一年六月廿日。神
 明町を又轉宅せしあり。同書^{牛寂}が句の^もがきた。晋子南港
 おろつ。竹を植て有竹居と号^もとあり。南港とあぬ。神明町
 を持宅せし。芝邊のやうにむかへる。元禄十一年十二月十日。池魚
 の災^ああひて。家を^しあひ^るは。焦尾琴^{の序}ああるハ。かの南港
 小居住の時^ある^下。焦尾琴^{の跋}を^ある^に。五元集に。類焼の^い邊^鄙
 の居^を同て。一樽^{小雞}卵^をか^るる^人あ^をか^きて。句あぬ。彼芝邊^の
 類焼の後。あ^をく^邊鄙^小住しと名ぶ。辺鄙とつふ。いづれのあや
 つふ^びと^あつ^びと。和漢文操^{不其角}が号。雷柱^子とあり。つふ
 若葉^類相^子を^あぬ^バ。涉川^{とも}り。又狂雷堂^六藏^菴。
 善哉^菴文^合菴^元。元禄十年^歲旦^帳ニ^アリ。等^の諸^号あり。画^名を^著子^{とい}ひ。

一ハ折ふふれての戯号あるべし。元禄のまゝ茅場町薬師堂の
邊に住ぬ。類柑子に草 あやうき 其のちうきあうき。植木店といふ所。但来
先生の家あり。其角が口をさみふ。 但来翁その以護園に号ス護ハ其角と
お希一是茅場町に居住の証あり

梅が香や隣ハ萩生惣右衛門

此句いつれの集おもええざぬども。もつり人口は残あり。實否ハ志下
を。宝永四年丁亥二月晦日没也。享年四十七。二本榎上行寺に葬る。
法名喜寛居士。又深川森下町長慶寺小墓碑あり。其角病床小
画一。無眼の達磨一紙をうづむと類柑子不又也。同書白櫻其角
をうづむ句のそ一がまに。此所ふ年ひさしく住あぬぬ。鏡の渡
宇も袖をひくそとあぬぬ。茅場町小住一。時。身まうりころりあま
りり。宝永四年二月廿三日春暖閑炉小坐の吟とて

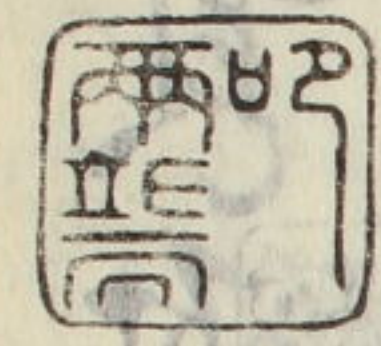
雪の曉寒一三ろりぐん

そして病ふあ。ぶろふ七日を過て。身まうりころり。類柑子青流が文
不又也。是其角一生の口をさみふのかざりとあん。本朝文鑑と辞世ト云ハ非之

其角著書目録

- 田舎句合一 延宝八 みる栗 天和三 蠢集一 貞享元 新山家 日二 續みる栗 日二
- 花つみ二 元禄三 かつを昔 日一 雑談集二 日四 秋の露 日六 枯尾花 日七
- 句兄弟三 日年 若葉合一 日九 裏若葉 日十 錦繡段 日年 三上吟 日十三
- 焦尾琴三 日十四 其角の家 時代不詳 新二百頁一 類柑子 三遺稿 宝永四 五元集 四日上 延享四
- 新三百頁一 以上二十一部

其角印譜 青山白石の印ハ人の不切



印兩端

宝月其角



御年
ヨリ
居候
御上

十歳入學

大圓寺

十四歳 於堀江町 本草綱目写

十五歳 治 主治 發明

十五歳 内經素本 易經素本写

廿二歳 伊勢物語書之

廿三歳 右表帛出来本 段一紙之

衣一襖義とて刀 戸徳也

廿六歳

其角が... 其角の...

円覺寺 太巖和尚詩學 易傳受

其角が... 其角の... 其角の明鑿をまうのし

八 其角雨乞句考

其角牛島... 雨乞を乞ふ者ありて 五元集 夕立や田をみめらうの

神あつとせ... 八つねの日... 詳あふ... 予三圍の社主

つきて... 元禄六年六月廿八日の... 然則其角二十三

歳の時... 一説小南茅場町回船問屋某... 俳名を白雲門人

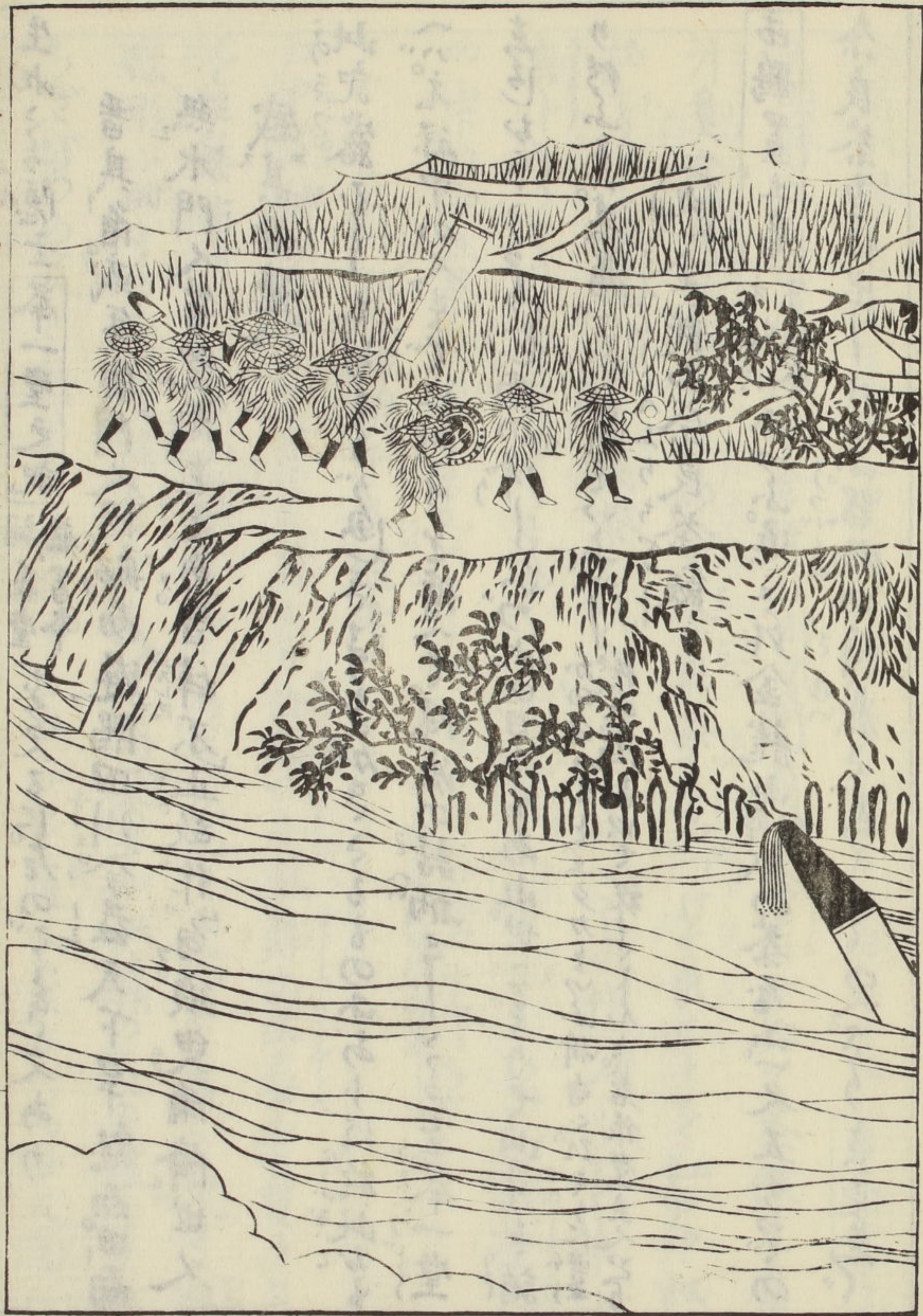
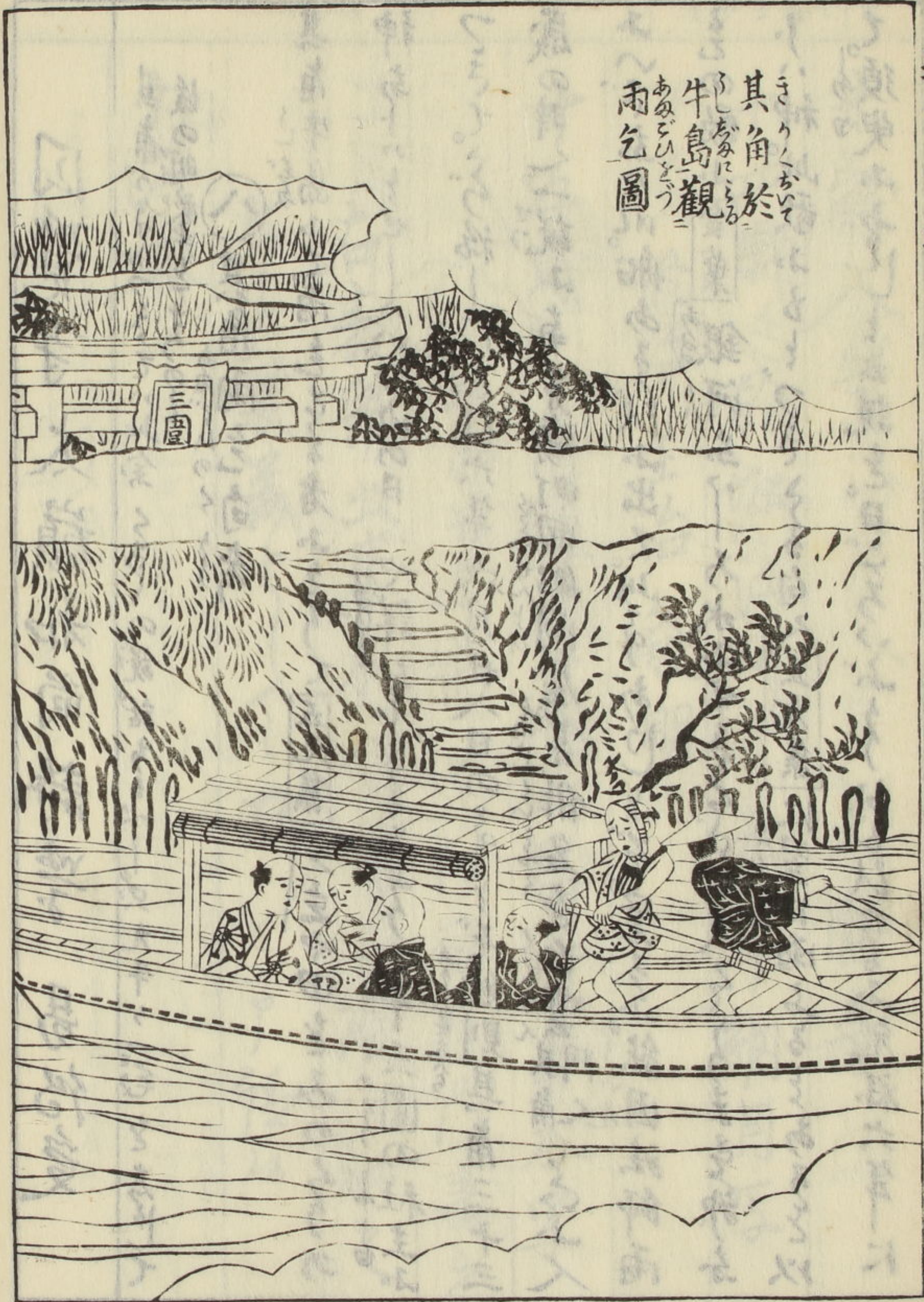
ふいさ... 船あそびみ出... 此るありしとぞ... 案る不能因法師雨

乞の歌... 金葉 銀河... 水ふせ... 天々... まま神ふ

トハ神... 此歌ふも... つさ... 五元集 翌日雨ふるとあるを以

て... 須臾ふ... 且と云説を... 日ご... ふうり... ちり... 元禄六年に

其角於
牛島觀
雨乞圖



生れくる隠士一 奉一堂之記

詞花堂 蔵写本

をえりた。左のぐらと文あり

晋其角。或年與門人同船而遊隅田川。今茲天下旱魃而田面無水。門人等望雨乞之。旬晋辞不止。故作句須臾雨降。世人感其俳德。

此記露みづもつらもつらうぐぬみさうをがさらるものふあり。於此おもへハ。元禄中の人。もてに此子を傳へて。風流の語柄ことばを奉一堂

去はむさうもあせ。雨の降ふりハいつれの日もあれ。せこそりて此子を語り傳ふ。其角かくがなまれなつふふ。かの白かちと。エタカと。ふ折句く。びそくに豊作とよさくの意を以て。祝いわいとんと。著作堂主人しゅさくどうしゅじんと

九 金龍山奈良茶飯

西鶴置土産

元禄六年板本

ふつふ。近ちかに金龍山きんりゅうざん 聖天せいてんの茶屋ちやゑ。一人五つづの

奈良茶を仕出しだし。るる小器物せうぶつの綺麗きれいさ。色いろくくとのへへさうさうととを急いそぐ

の者ものは勝手のよき中ちゆうく上かみがあもある自由じゆうあり。まま事跡ことせき是考こ

云明曆大火の後。淺草金龍山待乳門前の茶店ちやてん。小始せうて茶飯豆腐

汁じゆ煮に凍こ煮に豆まめ等らうをとのへて奈良茶ならちやと名なづけて出でせしを江戸中えどちゆうは

はしよりも金龍山の奈良茶ならちやをひひちちんとと。この外ほかめめづづひひままりり小

島しまトトりりそれそれよりよりおおひひくくききみみぐぐの美服店びふくてん出で来き。よりよりししらら彼聖天かのせいてん

の山下のやまもとの奈良茶ならちや衰微せいゐ不ふおおよよひひとと云い。安やするる小こ江え戸とふふああららちちや

十 芝神明千木檀考

江戸芝神明の祭礼まつり毎年九月あり。曲物まがものの小櫃こびつ。鮮あま土つち生姜しやうがを賣うるる。え

を生姜市しやうがしととりり彼小櫃かのこびつを土人つちびとちちぎぎびびつつとと云い木きを尾おくくるる。色いろぎぎてて飯

櫃形びつがた小曲せうまがととりり小丹せうにとと緑青りよくととももつつててふふ不ふ茶ちや如此ごと藤の花ふじのはなの鈴すずありり此

ちぎびつちぎびつの説せつささぬぬぐぐありりとと之これどもどもみみ事こと安やす説せつ之これ案あんるる不ふ風俗ふうぞく文選ぶんせん吾われ

